

軽井沢へ (3)木曾路の奈良井宿

北軽井沢からの帰路に、我ら老人夫婦は、時間的には何の束縛もないので、北杜の仙人と天女様から勧められて、さらに山奥へ車を走らせることにしました。初めて木曾路に入りました。島崎藤村の「木曾路は全て山の中である」と言う言葉はどこかで聞いたような気がしますが、中央道の塩尻を出て、一本道になる山の中へ入って行きました。木曾路は駒ヶ岳と御嶽山の谷あいの中津川に沿った中山道

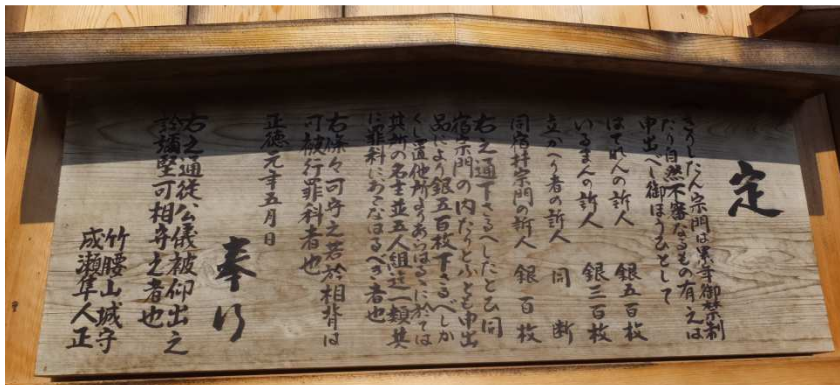


の一部をさす道です。江戸と京を結んだ重要な街道で、JR中央本線に沿っています。目指す奈良井宿は中山道 34 番の宿場町です。奈良井宿は「重要伝統的建造物群保存地区」とされていて、道筋は1km



にわたって江戸時代の古い家並みが美しく保存されていました。木造のどの家にも屋号がついています。タイムスリップしたかのように、しかも、日本人なのに、異国情緒を感じる風情でした。

奈良井宿には正徳元年(1711)の高札が保存されて掲げられています。これを見るのが第一の目的でした。町はずれに高札場があって、ここに数種類の高札が展示してありました。その中で「きりしたん宗門」を御禁制とした高札があります。密告を勧める内容で、報奨金は驚くほど高額です。



バテレン(司祭)	銀 500 枚
イルマン(修道士)	銀 300 枚
立ち帰り(隠れキリシタン)	銀 300 枚
同宿(家族、家人)	銀 100 枚

(銀相場は時代により変動しますが、銀一枚は43匁で、一両が56-82匁ですから、銀100枚となれば、約70両。10両の金を盗むと獄門、最高の遊女の身請けは20両という時代ですから、非常に高額だと言えます。)

豊臣秀吉は1587年にキリシタン禁制と言いましたが、キリスト教は広まっていきました。1596年、最初の殉教者26人が京都に集められ、長崎で処刑されました。「高山右近」氏は1615年、第二代将軍徳川秀忠による禁教令によって、家族もろとも、国外追放となっています。ザビエルの来日によって、日本人は高い西洋文明への憧れを持つと同時に、天地創造による神観、貧しい身分の低いイエス・キリストの無私の愛による神の啓示、清い倫理観などに感動し、多くの人々がキリスト教徒になりました。1661年、徳川幕府は本格的に禁制を始めました。幕府はイエズス会を操る神聖ローマ帝国の世界制覇の野望を察知し、キリスト教を拒否し、激しい弾圧を加えたのです。

キリシタンを撲滅するために、身元を証明する寺請制度が採用され、全ての人はいずれかのお寺の檀家として、宗門改めを受ける義務が生じました。ですから、お寺が信仰と関係なく、邪宗ではないという戸籍係のような仕組みに用いられたのです。こんな山の中に隠れて信仰を守っている人々がいたのでしょうか。宿場を通る全ての人々にキリシタンに対する危険視、嫌悪感を与える目的があったのでしょうか。約300年の弾圧を経て、キリシタン禁制は明治6年(1873)に完全に廃止されました。

「新津軽風土記」に1865年の楼主と抱え女の間で交わした請け状の記録が記されていて、私娘さま当21に相成、御法度の切支丹宗門に御座なく候、代々禅宗にて、弘前蘭庭院檀那にまぎれ御座なく候、すなわち寺請状所持つかまつり候、諸親類さしさわりなくたしかなる者故此度貴殿方へ勤奉公に差置き申候処、実正に御座候、これがため、身代金20両只今のこらず受取申候…とあります。キリシタンでないこと、寺の門徒であること、金銭の相場が記されています。悲しい記録ですが、奈良井宿の高札から150年経た、津軽と言う辺境の地にあっても、全く同じ状況であったことが分かります。